
WyvernCourier

市太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

WyvernCourier

【Nコード】

N9924X

【作者名】

市太郎

【あらすじ】

特技はトラウマになるほど動物から懐かれます。そんな主人公が落ちた穴の先は異世界の空だった。落下していく主人公を助けたのは巨大なワイバーン。主人公の特技にてストーカーと化したワイバーンと共に、主人公は新たな世界で東奔西走する———予定。

01 私、モテるんです。(前書き)

穀史二五二氏作の『トンデモわいばーん』からネタをお借りしております。

01 私、モテるんです。

生まれ落ちたその日から私はモテた。とにかく、モテた。老若男女問わずだ。

とは言っても乳幼児期の記憶は定かではないので、家族から聞いた話。

家族から幾度か話を聞いてはいたけれど、小学生へ上がる頃にはさすがに自覚した。

私はモテるのだと。

何かそういうフェロモンが出ているのではなからうか、なんて疑問を通り越して確実に出ているとしかいいようがない。

目の合う距離まで近づくと、相手は必ずストーカーと化す。

自覚が足りなかった頃はマジで怖かった。

自分より小さければまだ平気だったが、小学一年生になりたての女子が成犬の雌セントバーナードにのし掛かれペロペロではなくベロンベロンされる恐怖を想像できるだろうか。

口臭は言わずもがな、セントバーナードに滴るほど涎を塗りたくられ、泣きながら粗相したのは良い思い出である。

私のファーストキスは同性の異種族に奪われ、後にも先にも彼女以上に熱烈なキスをしてくれる同族の異性はいない。

そう、私はモテる。

人間以外に、という注釈つきで。

小学生時代はとにかく動物が恐ろしかった。

起床し窓を開ければ雀から鳩から烏と近場に住む野鳥がやってくる。

白雪姫のようにアハハウフフならまだ可愛い。勢いよく飛来してくる恐ろしさは某パニック映画を凌ぐものがあった。

たまたま野良猫生息地帯を通れば、どこの笛吹ですかというくら

い野良猫を従えて泣きながら帰宅をし、大型犬を飼う家の前を通れば恐るべき跳躍力によって塀を飛び越えてのし掛かられ、遠足で動物園へ行けば私はスターさながらに檻の中から熱視線を向けられるのである。

中学、高校と歳を経て、さすがに自分の異常性を認めた私は動物達と上手く付き合うために色々と実験を重ねた。

結果、視線が重なる距離、もしくは視線が重なることによって彼らは私のストーカーと化すことが分かった。

目がばつちりと合う距離で、互いに認識しあうと彼らは種別問わず某CMのキャッチコピーのようにまっしぐらでやってくる。

視線の合う距離でもついては来るのだが、視線が合わないと彼らは諦めて後についてこない事を学んだ。

この発見は私にとってかなり大きく、高校以降の被害は格段に減ったのである。

また、犬猫でしか分からないのだが、生まれたてで視力が乏しいと私が認識できないようなのでストーカーと化すことはなかった。

おそらく、鳥類も同様と思われる。

ちなみに、この訳の分からないフェロモンは残念ながら人間には効かないようである。

実績は二十三年を向かえ未だ更新中である。非常に残念だ。

他、昆虫類にも効かない。

全ての動物と接触を果たした訳ではないので確かとは言いが、恐らく人間以外のほ乳類、鳥類、魚類に効果があると思われる。

そして――――。

そして、恐竜の類にも効果があるようだ。

ただいまワタクシ、立科薫は声よ枯れろとばかりに悲鳴を上げて高い空より地上へ落下しつつ、寄って集ってきたプテラノドンもど

きの団体から熱烈にまとわりつかれております。
誰か助けてーっ！！

02 私、迷子になったんです。

その日、私は直属の上司に頼まれて役所へ出かけることになった。それを聞きつけた隣のエリアにいる営業部長がついでにと用事を頼んできたのが事の発端だと思う。

昼食を済ませて午後一でまずは役所へと向かい、用を済ませた私は再び電車に乗って会社のある駅を通り過ぎた。

目的地は都内ではあるが都心から外れたローカルな駅で、改札を抜けた先にあるメイン通りはバスがぎりぎり擦れ違えるような細い通りだった。

十分ほどその通りを歩き、とある細い道を左に入っただけでは良かったのだが、至るところに『この先車両の通行できません』の立て看板が目立つ辺りで私は焦りだした。

抜けられると思って進んだ先は駐車場となっている私有地であったり、自転車がやっと擦れ違えるような細道が五差路であったりと右往左往しているうちにすっかりと迷子になってしまったのである。目的地は取引先の会社で用事自体は書類を預かってくれれば良いだけという簡単な物であったが、道に迷ってしまい現在地さえも分からないという状況。

とにかく一旦メインの通りへ戻ろうと、携帯でアクセスした地図を見ながら足早に進む。

昨今、地下鉄のポスターでは『ながら歩きを止めよう』と喚起していたりするが、正直それどころではない。寧ろ構っていられるかという心境だった。

ながら歩きをしていなければこんな事にはならなかったかもしれないのにと、悔いても悔やみきれないが後の祭りである。

通り過ぎざまに電信柱の番地を確かめ、そして携帯の地図に目を落とした瞬間、私の踏み出した左足は地面に触れなかった。

よく言えば昔ながらの情緒ある町並み、悪く言えば整備が行き届

いていない裏道である。

窪みがあったのかと焦ったが、上体は傾げど左足は一向に地面へ到着しない。

段差どころかよもや蓋の開いたマンホールにでも落ちたのか。そう思わざるを得ない。

転びそうになる誰しもうるすように、衝撃を少しでも緩和しようと咄嗟に伸ばした手が宙を搔く。

手に持っていた携帯が放物線を描いて道路に転がり滑るさまを見たのが最後、穴に落ちた私の視界は闇に覆われたのである。

自分の腕も認識できないほどの真っ暗な闇の中、次第に落ちる速度が増していくのが分かる。

あらん限りの悲鳴を上げ続け、息が切れだした頃ようやく違和感に気付いた。

いくらなんでも落ち過ぎやしないかと。

マンホールに落ちたとしてもいい加減に底へ衝突してて良いのではなからうか。

肩に掛けた鞆を抱き込み、膝を折り曲げて正に身を護ろうと体を丸めたまま、こんな状況の中で周りを見る余裕を次第に取り戻す。

実際、真っ暗なので周りはおろか自分の腕も見えない状況ではあるのだが。

そう、落下している重力は感じるにもかかわらず風を感じないのである。

まるで、超高層ビルの最上階からエレベーターで一気に一階まで下りていくような感覚といえいいのだろうか。

落下し続けてどれほどの時間が過ぎたのか、まだ数分といったところだと思うのだが悲鳴を上げるのにも疲れた頃、ふと気付けば暗闇に目が慣れた時のように薄ぼんやりと自分の身体が見えるようになってきた。

目が慣れたのではなく、暗闇が薄れてきたようである。

上と思しき方を見上げても落ちたはずの穴は見えず、下と思しき方を見ても出口は一向に見える気配がない。

内心、焦りと不安で一杯なのだが、いかんせん何も手立てが無い。唯一のよすがである鞆をひたすら抱き込んだまま落下に身を任せていると、やはり辺りの明るさが増しているように思えてきた。

自分の身体を見る事もできないほど真っ暗であったのに、今では限りなく黒に近いグレーに思える。

時間が経つにつれ、やはり気のせいではなく徐々に徐々にと辺りは明るくなり、今では真っ白な世界になっている。

真っ白というか、濃霧の中にいるような感覚である。

ドライアイスの煙の中を進むように、落下する身体に靄がまとわりつき流れていく。

一体自分の身に何が起きたのか、どこへ向かおうとしているのか、答えの出ない幾度目かの自問を繰り返したとき、とつじよ世界は変わった。

ボフンツと効果音でもつきそうな勢いで真っ白い濃霧の世界から吐き出されたそこは、澄み渡った清々しいほどのスカイブルー。

お尻と背中を下に落下していたため、靄の名残が飛行機雲のように薄くたなびいているのが見えた。

それまで感じることのなかった風の音、視線を転じれば遥か遠くには日の光を反射させる海、開けた土地に小さく見える固まりは建物の影だろうか、大小と大きさは様々だが点在している茶色いスペースは農作地かもしれない。

町と思えるそれらはかなり遠くに見える。

強い風圧の中、ぎこちなく視線を落下方向へ向けてみると、でこぼこと隆起している茶色にまばらな緑——山だ。と認識した途端、顔が引き攣った。

漏れなくミンチ！

ちよっ！ まっ！ やっ！ どっ！ なっ！
パニくって言葉にならない叫びが頭の中で繰り返される。

いっそのこと気絶できたらどれほど良かったか。

迫りくる死へのカウントダウンなんて数えたくはない。

助けてくれるものなら悪魔でも良いから縋り付きたいといったそんな時、『ギャー?』とやけに間延びした声が直ぐ傍から聞こえたのである。

03 私、玩具じゃないんです。

ギョツとして声の方を見てみれば、数頭のプテラノドンもどきが悠々と風に乗りながらというか、一緒に落ちながら不思議そうな眼差しで私を見ていた。

プテラノドンのように嘴は長くない。寧ろ短い。馬程度の鼻面と
いうのだろうか。

猫や爬虫類のような縦長の瞳孔に琥珀色の虹彩、目の下まで裂けた口から覗く牙は私の腿より太そうだ。

頭の上には二本の角、えらの辺りにも角のような棘のような硬そうな突起、そのボディはこれまた硬くて丈夫そうな鱗に覆われている。

こんな顔をした動物、いや恐竜……でもなく生き物を見たことがある。映画とか、本の挿絵とか、つまりファンタジーなドラゴンによく似た顔をしているのだ。

私に並ぼうと羽ばたきを止めている翼膜はまさに映画で観るようなドラゴンのようであり、前足はないが後ろ足の太腿はさぞかし脚力が凄いのだろうと思わせる逞しさ。

そして尻尾の末端には逆向きの棘が付いてて、先端にはハートを逆さにしたというか槍の先をつけたような形で殴られたら肉を軽く挟まれそうである。

尻尾の棘が生えている辺りから個体によってだが、黒ずんだ緑や紫の模様が入っていかにも毒々しい。

以前やっていたファンタジーゲームで見たことあるような気がする。

ドラゴンとはまた違う、ワイバーンというタイプそのものだ。

慌てて視線を転じれば、計六頭のプテラノドン改めワイバーンが付き合いよく落下している。

個体のボディは茶、蒼、緑、白、銅、黒と大変カラフルである。

その内の一頭、黒いのと至近距離でばっちり視線が重なる。あ、何か目が爛々としてきた。

そして、黒とは逆にいた蒼いのがパカッと口を開けて素晴らしい牙を披露してくれた。

私も迷わずに口を開けた。

「ぎゃーーーーーーっ!!」

一口ではさすがに無理であろうが、二口、三口なら余裕でいけそうな大きな口を間近で開けられれば誰もが叫ばずにはいられないだろう。

私の叫び声に黒のワイバーンがパチクリと瞬き仲間に視線を向けた。

目配せのようなその仕草はやけに人間臭く感じたが、地面に叩きつけらるかワイバーンに噛み殺されるかという二者択一を迫られている私には気に留める余裕もない。

叫び続ける私をよそに、ワイバーン達も何やら騒ぎ始めた。

『ギャーーーーー?』

『ギャアー?』

『ギュアー!』

刻一刻と地面が近づくこの状況で、けっして余裕があるわけではないのだが、彼らの鳴き声にアフレコを当てるとするならば―――。

『聞いた? ギャーだって、ギャー。可愛くね? ギャーッ!』

『聞いた聞いた。ギャー、良いな。ギャー!』

『イエーイ! ギャーーーーーッ! 俺も今度からギャー使うーっ!』

こんな具合に直ぐ傍でテンション高く鳴き合うものだから喧しいことこの上ない。

思わず両耳を塞いでいると、傍らの黒いワイバーンが急降下を始めた。

何事かと目で追えば、かなり距離を取ったあとに今度は私に向かって上昇してきたのである。

「っ……ひいっ！」

とうとう喰われるのかときつく目を閉じたが、訪れたのは痛みではなく軽い衝撃と重力に逆らう浮遊感。

「……？ あ、あれ？」

恐る恐る目を開けると、何と黒いワイバーンの背に乗っているではないか。

もしかして、このファンタジーな生き物にも私のフェロモンは有効なのか！ 視線を巡らせ他の五頭の様子も見てみたが、喰ってやろうという意気込みは感じられない。

感じられないが、うっかり全部とバッチリ目が合ってしまった。中でも一番大きいのが黒のワイバーンであったが、どのワイバーンの背も私が余裕で大の字になれる大きさである。

しかし、鞍も手綱もなく、ツルツルとした鱗ではしがみつきようもない私は非常に不安定な状況であり、彼らがそんな私の心情を酌めるはずもなく、景品は私という争奪戦が始まったのである。

あ、止めて。と思う間も無く蒼いのが黒いのに体当たりをし、宙へ投げ出された私を器用に白がキャッチーしかけたと思いきや茶色いのが白の顎を蹴り上げる。白に掴まえてもらえず落下する私を待ち構えている緑がゴールと思わせて、銅が羽ばたいた翼膜でトスをする。

空中でバレーボールをするワイバーン達とボールになった私。

トスをやーめーてー！ 誰か止めてー！ 私のために争わないでー！ とうか私を玩具にしないでー！

彼らのおかげで私はミンチとならず、大地に降り立つことができた。

地面へ下ろしてもらった途端に膝が崩れ、盛大にかましてしまったことは後に良い思い出となるだろう。

04 私、悲観したいんです。

無事、というには語弊はあるが、命を脅かされることなく大地に立ち、余裕を取り戻した私は改めて周りを見渡し絶望した。

なぜにワイバーン達があの場合にいたのかといえば、私が落ちた辺りはどうやらワイバーンの生息地の上空だったらしく、取り囲んでいるワイバーン達の他にもカラフルなワイバーンが空を飛んでいた、自前の巣穴に出入りしていたりするのが見えた。

小さい個体でもそのボディの幅は二メートルはありそうだし、羽を広げれば軽く見積もっても六メートルくらいはいきそうである。

全長に関しては、地に佇んでいても私の倍はあるから、ワイトルウィウスの人体図のように考えれば地面と接触する辺りを臍として頭のとっぺんまで三メートル越え、その倍で尻尾の途中までは七、八メートル、プラス尻尾の先まで入れてザッと十メートル。

ワイバーン相手に人体図が通用するとは思わないが、だいたい物の大きさを目測する基本にしているだけなので本当にアバウトな大きさである。

コンクリビルの一階は凡そ三メートル強、中層ならば三、五メートルといったところだから、小さい個体でも尻尾までの長さで三階ほどの高さというわけだ。

争奪戦ウィナーとなった黒は他の個体よりも一回り大きいので適当に十五メートルくらいと予想しておく。

ビル四階建てってところだ。うむ、実に大きい。

そんな巨体な連中の生息地なので、山一つに付き六頭前後という住宅事情らしい。

山の中腹以上が譲れない条件らしく、垣間見えた麓に巣は見あたらなかった。

山の高さにもよるがだいたい二層タイプで、下層には山の東西南

北に穴を掘って四頭、上の層には二頭から三頭、更に高さのある山なら頂上付近に一頭が巣穴を作って生息しているようである。

黒のワイバーンは連なる山の中でも特に高い部分に巣穴を設けているようで、雲が下に見えた。

つまり、酸素が薄いのではないかと思われる。高山病の症例を火急求む次第だ。私は自慢ではないが無知なのだ。

迫り出した崖が玄関に当たるらしく、降り立つ、飛び立つのはこの場所らしい。

のっしのっしと進んだ先は巣穴らしき洞窟となっており、大きな窪みには岩やら倒木なんかが敷き詰められている。

ふと、ペンギンの巣を思い出した。拾ってきた石を一生懸命敷き詰めて卵を暖める場所だ。

あれを十数メートルにまで拡大したような雰囲気である。

ペンギンが集める小石といった可愛らしさはない。大きい岩がゴロゴロ置かれている。

倒木もワイバーンのサイズからすれば小枝感覚なのだろうが、立派な木を薙ぎ倒して運んだ感が否めない。

折れた箇所が鋭利となっていて、危ないことこの上ないのだ。

黒のワイバーンはワッサワッサと羽ばたいて、呆然としていた私の意識を惹いてくる。

はつきり言ってギャーギャーと鳴くワイバーン語などを私が理解できるはずもないのだが、軽く胸を張って鼻息一つ吐き出すその表情は自慢そうである。

ドヤ顔しているワイバーンのアプローチを私流にアレンジして解釈してみた。

意識すれば『見て見て！ 超高層マウンテンビューなの！ パノラマ、凄いでしょ？ 高級物件なの！ 俺、強いから。これくらいのもんなんて当然なんだぜ？ 巣も見て見て？ 兵庫県産の本御影に屋久島の杉を取り入れてみたの、オシャレでしょ？』といった具合だろうか。

実は、動物相手の垂れ流しフェロモンとは別に、動物の意向を汲み取れるという特技を合わせ持っていたりする。

ペットを飼っている飼い主ならば、食事や散歩、遊んでという催促はそこはかとなく感じ取れるだろう。

会話はさすがの私とてできないが、動物からのそういったアプローチを普通の人よりも正確に読みとれるというものだ。

以前、バウリングガルなる玩具が流行ったりもしたが、高性能なバウリングガルが内蔵されいるのだと思うことにしている。

この特技を活かして動物病院にでも勤めようかとも思ったりしたが、私と出会ってしまった動物達は必ず訪れる別れに泣き叫ぶ。

誇張一切無く、泣き叫ぶ。

今生の別れのように、実際二度と会う機会は無いのだが、生木を裂かれるかのような叫びは、後ろめたいことは何一つ無いというのに罪悪感を募らせる。

抱き上げる飼い主に四本の脚を目一杯突っ張らせ、必死に顔を背けて叫ぶペットの姿を見て、飼い主さんには本当に申し訳なく罪悪感に苛まされたものだ。

とてもではないが、動物と係わる仕事は無理である。

動物に懷かれやすいの、などと人に自慢出来る領域を越えている私であるが、さすがに想像上の生き物は手に余る。

穴に落ちたときから可笑しいオカシイと思っていた。

現実から目を背け、夢なのだ、白昼夢なのだと思い込もうとしてみたところで無駄であった。

命を脅かされる危機がひとまず過ぎ去ったことで緊張が緩んだのか、今度はアイデンティティの喪失で自分を見失いそうになった。

現代社会でこれほど大きくカラフルな鳥類なんて聞いたことなどない。どう見ても鳥類とは思えないが。

日本ではない。仮に地球のどこかだとしても、もしかしたら現代でない過去の、白亜紀かもしれない。

得意げに見せられた岩と大木の間に見える薄汚れた白い棒は骨だ

ろうか。

素早い動きで岩陰を走るのは何の虫だろうか。

文明の欠片も無いこの場所でどうしろというのだ。

冷静に考えれば考えるほど気が触れそうになる。

思わず腹の底から叫んでいた。

「やめっ！ やめてっ！ アンタ、今そこでトイレしたでしょ！
用済んで舐めてたでしょうがっ！ その舌で舐めないでっ！ 舐め
んなー！ーっ！ー！」

顔を寄せて舐めようとしてくるワイバーンの鼻先を両手だけでは
足りず、片足をもあげて必死に舌を出させまいと阻止する。

人が真剣に苦悩しているにもかかわらず、茂みの向こうで恍惚な
顔をしていたのが横目に見えてた。

その長い首が下半身に曲げられてたのも見えた。

茂みで見えなかったとは言え、盛大な水音とその後の行動で何を
していたのかくらいは分かる。

舐めたいのっ！ 舐められて溜まるかっ！ の攻防で、まずは私
が辛くも一勝を納めた。

マジで危なかった。

その後、落ち込みそうになるたびにワイバーンが慰めようとして
か舌をのばしてくるため、幸か不幸か私は自分の不孝に浸るところ
ではなく、本当に幸か不幸なのか……自分を見失うことはなかった。

とは言え、絶望は去ったとは言い難く、人類未踏と思えるような
山の頂上にいては、遅かれ早かれ死んでしまう。

ライターも無い状況で火を興す術も知らず、鞆にあるのはペット
ボトル一本の水、携帯栄養食、飴一袋と訪ねる予定であったお客様
への菓子折りだけである。

生菓子でないのは幸いだが、一週間もたない。

何とかして文明のある場所へ行かないと———そういえば、空から落ちていた時、建物というか集落よりももう少し大きい規模、町のようなものが見えた気がする。

遠くだったからはっきりは見えなかったが、家を建てる技術があるならそれなりに文明も発達していると思っただろうか。

この際、高床式な建築技術でも構わない。

衣食住の確保をしなければのたれ死んでしまう。

05 私、案外肝が据わっているようです。

動物の多くが伴侶となる相手に何かしらアプローチをする。物を贈ったり、求愛ダンスを披露してみたりと様々であるが、どこも知れぬこの世界でも求愛活動の基本は同じようである。

黒は好条件らしい住宅を得意げに見せてくれ、胴はのた打ち回る首無しアナコンダっぽい生き物を持ってきてくれた。獲れたて新鮮フレッシュなものだから、長い尾が未だに激しくくねっていて非常に危険である。誉めて誉めてとばかりに啜えたまま近寄らないで頂きたい。察してくれ。もがくアナコンダの尾で黒が下顎にアッパーカットを喰らって少々不機嫌である。

白いのは熊っぽいのを持ってきてくれた。身体に綺麗な穴がたくさんついてるのだが、その尻尾の棘々で仕留めたのだろうか。フルスイングでもしたのだろうか。開いた穴の辺りがドドメ色に変色しているのだが、問題なく喰えるのだろうか。いや、喰う気はないのだが……いきなり解体ショーが始まった。鋭利な爪で熊の腹を掻っ捌き、取り出した内臓を差し出してくる。喰えというのか。熊の胆は確かに高級品だがそれは喰えるのか？ フレッシュな赤が徐々にどす黒くなっていくのは毒なのではなからうか。

彼らワイバーンは巨体なので、仕留める獲物もとうぜんとばかりに大型動物ばかりである。大型であろうと小型であろうと、ナイフも火ないこの状況では頂くわけにもいかないので気持ちだけ頂くということで丁重にお断りをする。

他、蒼と茶は岩を持ってきてくれた。岩の中に色のついた石が埋まっている。宝石か何かの原石と思われる。緑は歓迎の舞を披露してくれた。

雌雄の区別は付かないのだが、プロポーズというより大好きアピールと思われる。

君達の気持ちは重々に理解したので自重して頂きたい。

しかし、かなり陽も落ちてきて辺りが夕焼け色に染まってきている。

私の手よりも大きい虫が徘徊する場所で夜を過ごすのは正直引ける。いや、過ぎたたくない。かといって、山の八合目、九合目辺りに位置するこの場所から徒歩で麓へ下りる気にもならない。頂上とは言っても洞を掘る関係上、この辺りが巢としては最高地なのだろうが、人間である私には関係のないことである。駄目元で彼らへ交渉を試みた。

翼を持つ生き物なので鳥目かどうかは気にかかる。肉食である猛禽類、梟は夜に活動していることもあり、少なくとも恐竜に近いと思われる彼らは鳥類とも思えないし、恐竜の類に鳥目があるのか分からないが大丈夫と思いたいところである。

体の大きさから黒いワイバーンがリーダー格と思われるので、試しに話しかけてみた。暗い夜でも飛ぶことは可能であるか？ と。

黒のワイバーンはワッサと緩く羽を広げて傍らに居た仲間に目を向けた。

その仕草たるや、実に人間臭く私の琴線に触れる。

『おい、聞いたかよジョージ。キティちゃんが、俺らに夜でも飛べるかってさっ！ 笑っちゃもうよな！ 俺らを誰だと思ってんだよなあ？ ワイバーン様だぜ？ ワイバーン様！』

『まったくだぜ！ 俺らワイバーン様に不可能なんて無いのになっ！』

などと、ギャギャ姦しく鳴いたワイバーンどもは胸を張って私を見下ろす。鼻から吐き出された息が掛かってよろけそうさ。

自分でアフレコしておいてなんだがむかつく。

夜など関係なく飛べると見做す。ならば、どうか麓へ下ろして欲しいと、不平は堪えて下手に出てみる。

『なんで？』

とばかりに小首を傾げて瞬きする仕草が可愛いと思えなくもない。食べ物が無いからと伝えれば、先ほど貢がれた首のないアナコン

ダもどきと開きになった変色熊もどきをワッサと片羽を広げて促された。召し上がれませんか。

いくら食い意地の張った日本人とはいえ、ひ弱な現代っこに現地の食材をいきなり生とか無理である。

海外旅行の第一項目でもあげられているほどだ。まずは食材に慣れてから生だろう。

それに君達はその分厚い鱗があるから問題ないかもしれないが、高い山の上で薄着の私がどれほど辛い思いをせねばならぬのか。その辺りを無駄に懇々と説くこと数十分、手を変え品を変え言葉を換え『散歩』のフレーズで渋々とだが漸く麓へ下ろしてくれることに承諾をしてくれた。

話が分かる連中で何よりだ。

唯一のよすがとなってしまうたA4のファイルが入る大きな鞆をどうしようかとも思ったが、置いていく気にもなれないので学生のように背負うことにする。みつともないが、誰に見咎められることもないので開き直る。

地面にぺたりと長い首を伏せた黒のワイバーンへ失敬して鼻面から登り、首の付け根まで這ってなんとか落ち着く。命綱もシートベルトもないので非常に安定が悪く、身に纏ったリクルートスーツはミニでないとは言え、タイトな膝丈だから腿まで捲くりあげないといけないのが難点であるが止むを得ない。贅沢は言えない身の上である。

そんなこんなで何とか準備が整ったところで跨ったワイバーンへ声を掛けた。

落とさないようにと気遣ってか、黒いワイバーンはゆっくりと羽を広げ、逞しい脚で地を蹴り玄関口という名の崖から飛び降りる。

なぜか、茶と銅も続いて飛び降りてきた。肩越しに振り返ると、残りの三頭は食事をするにしようである。

薄闇に覆われた空に、上体を起こして眼下の景色を眺める余裕など私にあるはずもなく、太く長いワイバーンの首に伏せて必死

にしがみつく。

何せ両手両足を回しても届かない太さの首である。効果はさておき少しでも空気抵抗を減らしておきたいと思うところだろう。

風に乗り、少ない羽ばたきで緩く旋回しながら雲を抜けて大地に向かつていくが、垣間見える大地は木々に黒く覆われワイバーンが下りれるような場所が見受けられなかった。

私が穴に落ちた日は秋も真っ只中だというのに真夏日であったため薄着であった。よもや、このような事態に陥るなどとは想定しておらず、ワイバーンが気を使ってくれているとはいえ、長時間風に吹かれ続けるのは寒いのである。寒いのだよ。まじで。

地平線の向こうから微かに覗いている日の明かりも弱く、体感的には初冬と思える気温と吹き付ける風はあつという間に体温を奪っていく。

早々に麓へ到着してもらわないと、漏れなくやんごとなき下半身事情が発生してしまう。

漏れなく漏れる……いやいや、そうではなくて。などと上の空であつた視界の隅に何やら光る物が一瞬見えた。

気のせいだろうかとそちらを見るとやはり光っている。

光っている——というのは語弊だろうか。

聳え立つ木々の中、だいぶ地面に近づいてきたのかぼつりぼつり開けた土地が見えてきた。

その開けた場所の一ヶ所で雲も無いのに紫の稲妻がパシパシと横に閃光している。上下ではなく横にだ。

更には、細い蛇のような炎が地面を走っては何かに当たったかのように弾けて火の粉を散らしている。

微かに人のような小さな影が幾つか見えた。

あれは一体なんだろうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9924x/>

WyvernCourier

2011年11月5日17時23分発行